KIT
キャンパス
レポート㉑

文・出島二郎
マーケティングプランナー

テーマは生体安全性を持つ医療用接着剤の研究です。

遠山 拓実（とおやま たくみ）
金沢工業大学大学院工学研究科
バイオ・化学専攻
博士前期課程一年
新潟県立六日町高等学校出身

いくつかの私大に合格したけれど、迷ってしまった。そのとき、高校の担任の先生から金沢工大を勧められたのである。優れた教育環境が理由であった。遠山さんは先生の言葉を素直に受け止めて、進学を決めた。そして四年で卒業と考えていたのに、大学院を目指すようになっていた。

「たしかにこの大学は、自己開発センターや数理工教育研究センターなどがあって、自分の能力をスキルアップしようと思ったら、手厚いサポートシステムがあるんです。資格取得や数学の勉強でよく利用しましたね。学部一年生のとき、大澤先生の授業で、先生の人柄に魅かれました。もともと有機化学が好きだったので、研究室はここだと思いました。」

学長でもある指導教授の大澤敏先生の専門は、生分解性プラスチック、環境調和材料、高分子化学など多岐にわたる。遠山さんは谷田育宏先生にも指導を受けているが、何度か取材で訪れた大澤研の活力ある風景が思い出される。

「研究テーマは『カテコール修飾キトサンナノファイバーを用いた医療用接着剤の作製』です。人にしっかり適合して、炎症などが起こらないようにというのが難しくて。カテコールは、たとえばムール貝に豊富に含まれていて、岩場に接触している部分にそれがあるんですよ。余談ですけど、漆にもカテコールに似た構造を持っているものがあるんですね。」

遠山さんは丁寧に研究の説明をしてくれる。よくわからないままだったが、材料の持つ化学的特性が感性にどのような影響を与えるかという感性評価については、日常的な次元で納得ができたのである。そこから、クラスター研究室へと話題がつながっていった。

「応用化学、機械、ロボティクスの学生たちが、それぞれの専門分野を活かした開発に取り組んでいます。ぼくたちは初心者や子供のチェアスキーのバケットシートに最も適した材料を選択し、フィット性の向上やリラックスできるかなどの心理的側面を調べることを目的としています。始まったのは去年からでまだ手探り状態ですが、おもしろい試みなので、続けたいと思います。」

遠山さんは課外活動でユースホステルサークルにも参加し、その濃密な学生生活を訥々と語る。就職は薬品関係の志望である。チェアスキーで共同研究をしている大手企業かもしれないが、夏ぐらいからインターンシップへ。

金沢工業大学
石川県野々市市扇が丘七-一
電話番号（〇七六）二四八-二〇〇